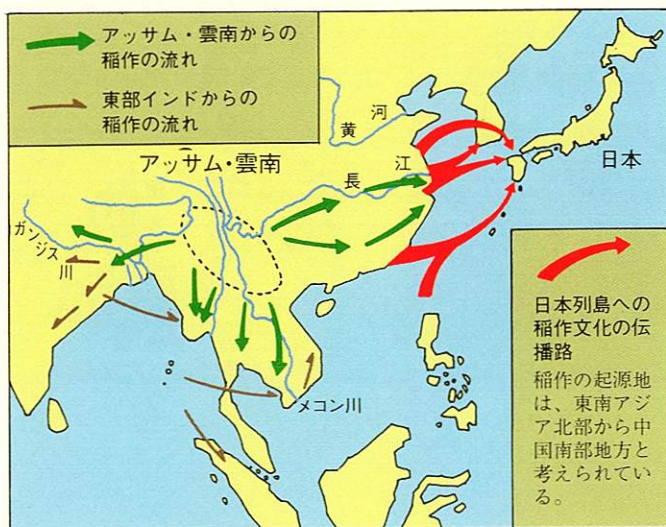


7 稲作の始まり



東アジアの稲作文化の伝播経路図 日本への稲作の伝播経路については、山東半島から朝鮮半島を経てきた説、長江下流域から九州に伝わった説、沖縄・奄美地方を経て伝わった説など諸説が考えられている(集英社『日本歴史』参考)。

■大陸から伝わった稲作

縄文時代につづく弥生時代は、農耕による食糧生産に基礎をおく社会が成立した時期で、紀元前四、五世紀から紀元後三世紀に至る約六〇〇〜七〇〇年間で、縄文文化が多少の農耕をもなったとしても、あくまでも食糧採集を基盤としたのにくらべ、弥生文化は稲作農耕と青銅器や鉄器などの金属器使用によって特色づけられる。

弥生文化には、大陸から伝えられた新しい要素と、縄文文化から受け継いだ伝統的要素とが認められる。これらが共存するということは、弥生文化が外来文化になって到来した人びとと、原住の縄文人とが一体となつてつくった新しい文化であることを物語っている。

■発展する社会

大陸から北部九州にもたらされた稲作農耕は西日本に急速に広まっていき、さらに東日本へと伝わっていった。稲作農耕が安定し、生産性が向上したことによって、弥生時代は縄



吉野ヶ里遺跡(佐賀県) 吉野ヶ里遺跡は弥生時代を代表する遺跡で、物見櫓と思われる掘っ建て柱の跡などが確認されており、現在は保存整備されている。



吉野ヶ里遺跡に残る土塁 吉野ヶ里遺跡には、環濠や物見櫓といった施設のほかに、防御用の土塁も残されており、弥生時代の集落の性格をよくあらわしている。

文時代にくらべ食生活の安定した社会となった。しかしこれにより富の蓄積が行われるようになり、地域や人びとのあいだに貧富や階層の差があらわれるようになった。このことを示すものに、墓のあり方がある。縄文時代の穴を掘っただけの土壙墓にくらべ、弥生時代の墓は複雑になっていく。方形や長方形といった特殊な形の大きな墓がつくられるようになっていった。これらは、権力をもった特定個人の墓と考えられる。このように人びとのあいだに階層差があらわれてくると、地域集団をまとめる首長とよばれる権力者を中心とした社会が生まれていった。こういった地域集団が他の集団をまとめていき、しだいに大きな統合体となってクニを形成していくのである。その間の事情は、中国の

歴史書『漢書』^{かんしよ}や『後漢書』^{ごかんしよ}、『三國志魏書』^{さんごくしきしよ}などの倭人伝^{わじんでん}に記されている。

弥生時代は、農耕社会の成立により、闘争の時代へと歩を進めていく。このころの集落には、周りを濠^{こう}で囲んだ環濠集落が多くみられる。環濠は防衛的な要素が濃く、その存在は、弥生社会のなかに国家形成へ向けての緊張状態が生じてきたことを示しているといえよう。



多摩川流域の弥生時代のおもな遺跡分布図(『東京の三万年』参考)

■多摩の弥生時代

多摩川流域を含む南関東地方では、弥生時代の初めごろはまだ稲作が行われておらず、縄文時代と同じような狩猟、漁撈、採集の経済を生活の基盤としていた。弥生時代中期以降になると、沿岸部を中心として集落の形成が始まっていき、稲作が開始されたと考えられている。しかしながら多摩地方など内陸部での稲作の開始はおくれ、弥生時代末期に至って、現在の八王子を中心とした一帯に、宇津木向原遺跡や船田遺跡といった弥生時代から古墳時代にかけての集落が営まれるようになった。

多摩川中流域の左岸をみると、福生市に限らず、青梅市から府中市周辺までのあいだに、弥生時代の集落はいまだ発見されていない。この地域に集落が形成されなかったのは、当時は治水や灌漑の技術が未発達で、多摩川がときに引き起こす洪水を防げなかったためと考えられる。また河床礫の多い土壌であり、石がゴロゴロしているこのような環境は、農耕に適しておらず、人びとの生活が営まれなかったのであろう。多摩地方の弥生遺跡は、洪水の心配のない多摩川の支流である小河川をのぞむ台地上に形成されたものが比較的に多く、ここで小規模な耕地を開発していたと考えられる。